それ、どうやって実現したの？

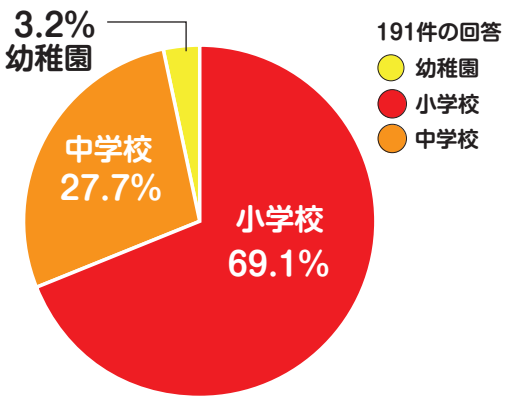
～ イベント編 ～

やるべきか、やらざるべきか。
やめるべきか、続けるべきか。
今の時代に合ったPTA活動ってなんだろう。
考えれば考えるほどPTA活動は難しい判断の連続です。
この特集シリーズでは、単位PTAの活動にスポットを当て、
一つの活動をどのように実現していったかを紹介します。
「やったこと」「やらなかったこと」に賛否を持ち込まず
レポートしていきます。第1回目はイベント編です。

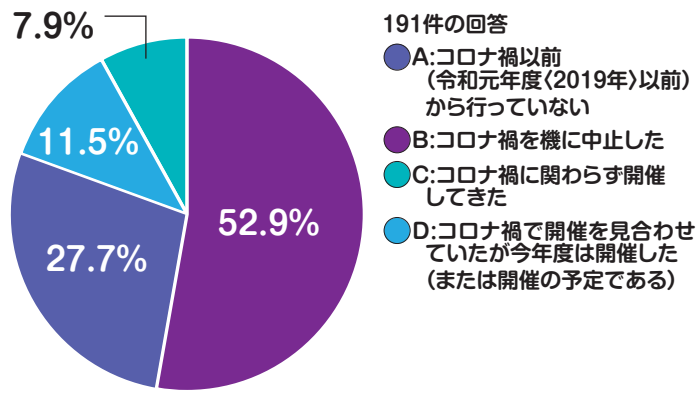
データで見れば・・・

今回の特集に関して、札幌市PTA協議会所属303単位PTAに対し、Googleフォームを利用し令和4年10月にアンケートを実施し、191件の回答をいただきました。たくさんのご協力をありがとうございました。

【1】所属単Pを教えてください



【2】単P主催のイベントについて現状を教えてください



質問【3】の「（開催したのは）どのようなイベントですか」については、多くのPTAより大変詳しい内容を記述していただきました。アンケートの回答からは、言わずもがなではありますが新型コロナウイルス感染症の流行がPTA活動に及ぼした影響の大きさを再認識するとともに、その中でも各PTAが活動を見直し工夫をしながらできることを探っている様子を垣間見ることができました。
今回は「イベント」に関するアンケートでしたので、実施に向けて工夫した具体的な例をまとめてみました。本紙面では一部抜粋したもののみ紹介させていただきますが、アンケートを集約したものについては、次号の広報紙または市P協ホームページに掲載し共有していく予定です。

File 001　札幌市立 円山小学校（中央区）

児童数：965名
クラス数：30クラス（2022.10.31現在）
行事名：円山フェスティバル

年間行事としては最大規模で行われてきたPTA主催のイベント、円山フェスティバル。体育館に全校児童が集まったり、全校で児童が行き交うお祭りイベントでした。三密回避の観点から令和2年度、同3年度は中止。令和4年度はどうするかが不透明な中、今年も委員会だけは立ち上げました。話合いを始めたのは6月。開催予定の9月の感染状況が読めない中、「もし開催したとしたら？」のイメージづくりから始めました。

フェスって何？

最初にやってきたハードルはフェスティバルを経験している保護者・先生・児童の少なさです。4年生以上の保護者・児童しか参加経験がなく、保護者にお手伝いを頼んだとしても、何をすればよいのかイメージがつかない。児童としても楽しみにしているというよりは「フェスって何？」な状況。先生方もある程度の入れ替わりがあり、実施の是非を聞いても、見たことがない先生方にとっては判断材料がありませんでした。「今年も開催はないだろう。」と思って消極的に委員・係を引き受けてくれた方もゼロではなかったはずです。このような状況で開催して、本当に成功するとは言い切れない状況でした。

安全対策と楽しさは両立できるか

実施する場合の焦点はどれだけ感染症対策ができるのか。また、対策をとりつつ楽しませられるかでした。企画の方向としては児童は教室内で楽しむ。つまり通常の授業と同じ感染症対策の範囲で行える内容にすると決まりました。ただ、それでは学校全体で行う行事としての一体感が生まれないので、教室のみで開催しつつもお互いが繋がり合える方法が必要でした。そこで着目したのが先生のタブレットと教室のテレビでした。

30クラスが別々に、ひとつになる

最終的にプログラムは3つになりました。個人での「しおり作り」、クラス内対抗の「玉入れ」、そして全校児童で勝ち残りをかける「じゃんけん大会」。手元の楽しみから、クラスでの楽しみに広げ、最終的には全校生徒で競い合い一体感をもたせていく流れでした。ここで問題になるのが、分断された30クラスをどうやってほぼ同時進行させていくかでした。そこでタブレットとTVの登場です。放送室から全クラスへTV放送を行うのです。教室にいる児童とお手伝いの保護者が次に何をすればよいかが分かるように、イベントの進行を実況中継していくことにしました。ただ放送室では各教室の様子が分からないので担任の先生のタブレットに入っている遠隔での職員会議システムを使い、放送室から全教室の様子が把握できるようにしました。それによりバラバラになりがちな進行に、ある程度のまとまりを作ることができました。「どうやら2年2組も玉入れが終わったようですね。これで全教室終了。では次のプログラムです。」と進行に一体感をもたせることが可能になりました。

それでも消えなかった不安

いよいよ内容も定まり、全校への案内を配ろうとした時、「待った」がかかりました。やはり一部の方には児童が全校で行き交う以前のフェスティバルのイメージが強いせいか、実施に対して不安の声が出たのです。全員に納得してもらうのはそもそも無理と割り切ることもできましたが、安全対策を徹底しており、昔のイベントとは違う事実が伝わるよう「お楽しみ会」と名前を変更して案内を配付することにしました。イベントをやりたい人だけが独走するのではなく、どうやったら不安がある人も引き連れていけるのか。ここを丁寧に説明・調整できるかどうかが「やる」にこぎつける要のように感じています。

TVの向こうにいる校長先生とのじゃんけん大会に湧く教室

伝わってる？児童729名、当日係100名

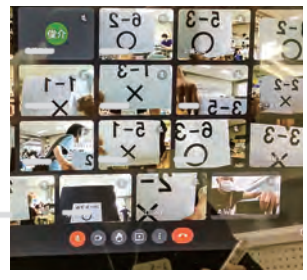
安全面からクラスごとの実施としているので、どうしても膨れるのが運営スタッフの数です。同様に、密集をできるだけ避けるために事前に何度も説明会を開くことができません。各クラスでお手伝いをしてくださる係さんには、ほぼ当日の説明一度きりで内容を伝え切らねばなりません。ここでも各クラスのテレビを活用しました。全体での説明に加えて、しおりの作り方や玉入れの方法を動画で放送して、児童だけでなくお手伝いをする側の理解の負担が最小限になるよう努めました。運営側は内容を熟知していますが、初めて内容を聞く人が「ついていけない」状況はイベントでは発生しがちです。どこまで徹底できたかは分かりませんが、伝える工夫にゴールはないと感じました。

じゃんけん勝者を放送室でのヒーローインタビューに送り出す

祭りのあと

運営に関わった保護者にアンケートを実施しました。イベントの運営側はやってよかったと結論づけてしまいがちですが、本当にそうなのかを検証して来年に向けての課題を整理しているところです。それでもやってよかったと思えることが2つありました。1つはとても地味ですが、お楽しみ会があった9/17からこの記事を書いている9/30までに学級閉鎖はゼロという事実です。もう1つはイベントの全校対抗のじゃんけん大会。勝ち残った児童と戦うラスボスとして校長先生に登場していただきました。イベントのあと、校長先生は下校する児童を見送っておられましたが、玄関にはリベンジじゃんけんを望む児童の笑顔の列。グーチョキパー、グーチョキパー、やれどもやれども列が終わることはありませんでした。

▶進行は分刻み。放送室から各教室に説明動画やアナウンスを送る


◀30教室から送られるサインを放送室で把握。実況中継で一体感も